



一人一人が 安心して 自分のよさを発揮できる学校

今成小だより



令和7年2月3日発行

続・世界に目を向ける人に

約1年前に学校だよりでもお伝えした「エルトゥールル号」。この話には続きがありました。そこで、今月のお話集会では1年生も一緒に話の続きを聞いてもらうことにしました。子どもたちが世界に目を向けるきっかけとなればと思っています。

今から約130年前、日本と親交を深め、仲よくなるためにトルコの大きな船、「エルトゥールル号」がやって来ました。帰り道に台風に遭い、587名の方が亡くなってしまいました。嵐の中、近くの村民が大けがをして苦しむトルコの人たちを命がけで助けました。清潔な服に着替えさせ、栄養をつけるための食事を作り、何週間もの間、看病を続けた結果、69人の命が救われました。



自分たちが食べるのも不足していた食糧を分けて命を救ってくれたことを知り、船員たちは深く感謝をしました。そして、母国に帰り、日本人がしてくれたことを人々に伝え、やがてトルコの国中に広まっていきました。この出来事はトルコの小学校の教科書にも載っていて、“同じアジアの西と東、日本は昔からの信頼できる友人” 多くの人々がそう思うようになったそうです。[ここまでおさらい]

実は、この話には続きがあります。昭和60年、イランとイラクという2つの国が戦争となりました。戦争は激しくなり、たくさんの方が亡くなりました。日本人の多く住む地区も爆撃が始まり、一刻も早くイランを出なければなりません。飛行機以外に脱出の方法はありませんが、イラクのフセイン大統領は「48時間後、イラン上空を飛ぶ航空機を無差別に攻撃する」と通告しました。イランには250人以上の日本人がいましたが、日本から飛ばせる飛行機はなく、外国に頼るしかありません。しかし、どの国も自国民の救出が優先です。空いた座席40人分を数か国が分けてくれました。でもまだ、200人以上が残されています。「日本から助けが来ない」「もう間に合わない」と絶望した気持ちになりました。

そんなとき、話を聞いたトルコのオザール大統領が、日本人救出を検討してくれました。トルコ航空のパイロットを集め、救出の話を持ち出すと、その場にいた全員が「自分が行く」と手を挙げたそうです。そして、タイム・リミットぎりぎりのところで、トルコ航空の飛行機が到着しました。215名の日本人を乗せた飛行機はイランを出て、トルコのイスタンブールに着きました。「本当に来てくれてよかった。」

「助かってよかった。」救われた日本人は心から喜び合いました。

しかし、なぜトルコは、この緊急事態の時に日本人のために飛行機を出してくれたのでしょうか。しばらくすると、トルコ政府からその理由について発表がありました。

「我々は、エルトゥールル号の恩返しをただけです。」

参考: 広報くしもと特集「色あせない絆」

国と国とが良好な関係が続けるのは容易ではありません。しかし、例えそうであっても、双方が合意点を見出すよう努力し続けるのは尊いことです。

本校の子どもたちが昨年度から取り組んでいる「話し合い活動」。学級会などで意見が合わないことがあっても、「折り合いを付ける」という経験を重ねます。すると、学級の考え方が広がり互いに配慮のできる集団へと少しずつ変容していきます。学校では他者と協働し生きていく際に必要な力をこのような形で育もうとしています。



3年生「第9回学級会」

以前は意見のぶつかり合いも多かったのですが、最近はお互いの思いをよく聞き、楽しく合意形成することが上手になってきました。

ほめて認めて、叱って諭し、また、ほめて伸ばす